

「泣いていいから、  
離すな」——深夜の  
動物救急で愛犬を  
救った無愛想な獣医に、  
涙ごと身体を診られて朝ま  
で離してもらえません

ぐちゅ、と音がした。

自分の身体から出た音だと気づいたとき、もう遅かった。

蓮の指が——あの、ハルの命を救った長い指が——おまんこの中をゆっくりと掻き分けて、膣壁のいちばん柔らかい場所を探り当てている。触診みたいに正確で、逃げ場がない。

「ここだな」

低い声がすぐ近くで響く。耳朶に当たる吐息が熱い。

「こっちに反応が出てる。——ここが、お前の一番弱いところだ」

「やだ……♡　なんで、わかるの……」

自分でも見つけられなかった場所。自分の身体なのに知らなかった場所を、この人の指が、先に見つけた。

くちゅ♡　くちゅ♡　くちゅ♡

蓮の中指の腹が、その一点を正確に押す。クリトリスの少し左側。そこだけが異常に敏感で、触れられるたびに脳の奥が白く明滅する。

「あ♡　あっ♡♡　蓮、そこ……っ♡♡」

声が出る。止められない。暗い待合室に、自分の甘い声が反響するのが分かる。蛍光灯は消えている。処置室から漏れる細い光だけが、蓮の眼鏡のフレームを白く光らせていた。

——どうしてこうなったのか、ちゃんと覚えている。

全部、この人の手のせいだ。

\* \* \*

一週間前の深夜二時。

ハルが吐いた。一度じゃなかった。四回。五回。六回目に、ぐったりして動かなくなった。

スマホで「犬 夜間 救急」と検索した指は、自分のものとは思えないくらい冷たかった。パジャマ代わりのスウェットに足を突っ込んで、すっぴんのまま、毛布にくるんだハルを抱えてタクシーに飛び乗った。運転手が何か言ったけれど、耳に入らなかった。

「アルクトゥルス」。夜間動物救急。

自動ドアが開いた瞬間、消毒液の匂いが鼻を突いた。

「誰かいませんか！」

叫んだ声が裏返った。受付に人はいない。白い蛍光灯だけが、誰もいない待合室を照らしていた。壁のポスターの犬が——ハルと同じダックスフンドが、幸せそうに笑っていて、それが今のハルと違いすぎて、涙がこぼれた。

奥からドアが開く音。

白衣の男が出てきた。長身。少し猫背。黒縁眼鏡。腕まくりした前腕に、薄く血管が浮いている。

——私の顔を、見なかった。

一瞥もくれず、腕の中のハルだけを見た。

「いつから吐いてる」

「に、二時間くらい前から——」

「何を食べた」

「い、いつもの、フードで——」

「持病は」

「な、ないです……っ」

短い質問を三つ。泣きながら答える私を遮りもしなかった。最後まで聞いてから、ハルを受け取る。

「預かる」

たった二文字。説明も、慰めも、ない。

でもハルを抱いた腕だけが——壊れ物を扱うみたいに優しかった。毛布ごと、ゆっくりと。処置室へ消えていく背中を見送りながら、伸ばしかけた手を空中で止めた。

待合室のプラスチック椅子に座って、三十分。一時間。

スマホを握る。連絡先を開く。スクロールする。

——誰に電話すればいいんだろう。

両親を起こすほどのこと？ 深夜二時に？ 友達は？ 「犬が」と言える相手が……いない。

(お前は一人で完結してるよな)

三年前に振られた、元彼の声がよぎった。

完結なんかしてない。ただ、頼り方を知らないだけだ。助けてと言う練習を、二十八年間、一度もしてこなかった。

処置室のドアの向こうから、声が漏れる。低くて、静かで、どこか甘い声。

「大丈夫だ、もう少しだ」

——ハルに、話しかけてる。

飼い主の私には「預かる」の二文字しかくれなかったのに。犬には、あんなに優しい声を出す人。

スウェットの袖を握りしめて、膝を抱えた。祈るしかなかった。

処置室のドアが開いた。

蓮が白衣の袖をまくったまま出てくる。前腕に薄く汗が浮いている。

「峠は越えた。急性膵炎だ。今夜が山だったが、持ち直した」

——膝が、崩れた。

立てない。安堵が津波みたいに全身を貫いて、一瞬で力を抜いた。冷たいリノリウムの床にくずおれる——

大きな手が、背中を支えた。

蓮が片膝をついて、倒れかけた私を抱き止めていた。処置室から出てきたばかりの手。消毒液の匂いと、かすかな体温。さっきハルの命を救った——その手。

「犬は大丈夫だ」

間を置いて。

「——お前の方が心配だ」

初めて、蓮が私の顔を見た。

眼鏡の奥の瞳が——動物を診るときと同じ目をしていた。冷たいんじゃない。観察している。生き物の状態を見極めようとする目で、私を見ている。

ぷつん、と何かが切れた。

堰が壊れるみたいに、涙が溢れた。声を上げて泣いた。蓮の白衣の胸に顔を押しつけて、鼻水も涙もぐちゃぐちゃにして泣いた。みっともない。すっぴんで、パジャマで、二十八歳にもなって、知らない男の胸で。

でも止められなかった。

一人で耐えていた恐怖が、「大丈夫だ」のたった四文字で崩壊した。助けてもらえた。この人が、ハルを助けてくれた。

蓮は何も言わなかった。ただ片膝をついたまま、泣き続ける私を支えていた。

——どのくらい泣いたか分からない。

蓮がゆっくり立ち上がって、私を待合室のソファまで半ば抱えるように移動させた。

「座れ。水を持ってくる」

紙コップの水を渡された。受け取れない。手が震えて。蓮が無言

で紙コップを口元に持っていく。

犬に水を飲ませるときの、当たり前の手つき。

少しだけ口に含んで、また泣いた。ソファに座った私の隣に、蓮が腰を下ろした。距離が近い。

——頭に、手が置かれた。

撫でている。

犬を撫でるときと同じ。掌全体で、ゆっくり。頭頂から後頭部へ、首筋へ。力加減が絶妙で、強すぎず、弱すぎない。ハルをあやすときと同じ、あの手つき。

「大丈夫だ」

二度目。今度はハルじゃなく、私に向かって。

「一週間は入院が必要だ。日中は俺の自宅で預かれる。夜間専門のクリニックだから、昼は空いてる」

淡々とした説明。でも、手は私の髪を梳き続けている。

「毎晩、様子を見に来い」

一週間。毎晩。この人のところに通う。

泣きながら頷いた。

蓮の手が髪から離れたとき——離れてほしくなかった、と感じたことに、気づかないふりをした。

翌日から、仕事帰りに毎晩クリニックへ通った。

初日の夜、蓮はハルの容態を簡潔に報告した。「食欲が戻った。数値も安定している」。ハルを撫でると、尻尾を振って蓮の方にも顔を向ける。——もうこの人に懐いてる。蓮がハルの腹を優しく触診しながら、かすかに口角が上がるのを私は見逃さなかった。動物の前でだけ見せる、あの顔。

私に対しては相変わらず素っ気ない。目も合わせない。「異常はない。明日も同じ時間に」。業務連絡。

二日目の夜。ハルにおやつを渡しながら、蓮の手がハルを撫でる様子をじっと見ている自分に気づいた。大きな手。長い指。爪が短く切り揃えてある。

あの手に——あの夜、髪を撫でられた。

(考えるな)

蓮が不意に顔を上げた。「何か？」

「な、何でもないです」

慌てて目を逸らした。蓮はそれ以上追及しなかった。

三日目の夜。

残業で遅くなった。疲れ切っていて、目の下にクマが刻まれている自覚はあった。でもいつも通り「大丈夫です」で乗り切れると思っていた。

蓮がハルの報告をしながら、不意に言葉を切った。

「……寝てないだろ」



「大丈夫です」

反射的に。口から出てくる、お決まりの嘘。

蓮の眉がわずかに動いた。

「飼い主が倒れたら、犬は誰が迎えに来る」

正論。ぐうの音も出ない。でもその言い方が——冷たいようで、よく聞くと「お前が心配だ」と同義であることに、数秒遅れて気づいた。

「コーヒーくらい出す」

蓮が奥に引っ込む。戻ってきてマグカップを渡された。指が触れる。この人の手はいつも温い。

「ハル、いい子にしましたか」

「吠えない。人懐こい犬だ。……飼い主に似たんだろう」

——それは、褒められたんだろうか。蓮はもう目を逸らしている。

ソファに並んで座って、コーヒーを飲む。蓮がハルのカルテを書いている。ペンの紙を走る音。蛍光灯の微かな唸り。沈黙。でも嫌な沈黙じゃない。

五分。十分。どちらも喋らない。

なのに——帰りたくなかった。この静かな空間にいたかった。この人の隣は安全だと、理由もなくそう思った。

立ち上がろうとして、ふらついた。疲労。視界が白く揺れた瞬間——蓮の手が伸びて、腕を掴んだ。

引き寄せられて、近い。蓮の顔がすぐそこにある。黒縁眼鏡の向こうの瞳が、まっすぐに私を見ている。

「……無理するな」

低い声。

——また涙が滲んだ。なんで。この人の前でだけ、「大丈夫」の壁が崩れる。初日も同じだった。この人がハルを助けてくれたあの夜から、私の防壁に穴が開いた。

蓮の手が涙を拭う。親指で。頬から目尻へ。丁寧に。

涙の筋を辿る指が、唇に触れた。

意図的じゃない。涙の軌道の延長線上にあっただけ。——でも。

「……ん♡」

口から、小さな音が漏れた。

息を呑む音じゃない。もっと——甘い。自分でも予期しなかった声。

蓮の指が唇の上で凍った。私は真っ赤になった。聞かなかったことにしてほしい。消えたい。

蓮の目が——初めて、動物じゃなく、女として私を見ている。

長い、長い一秒。

「……帰れ。明日も来い」

声がわずかに掠れていた。

逃げるようにクリニックを出た。外の空気が冷たい。心臓がうるさい。唇に蓮の指の温度がまだ残っている。

(何、今の。私、なんであんな声……)

(疲れてるだけ。あの人はただ涙を拭いてくれただけ。それだけ)

——自分に言い聞かせたけれど、身体はもう気づいていた。

四日目の夜。

クリニックの扉の前で深呼吸を三回してから入った。昨夜のことを意識しすぎて、蓮の顔がまともに見られない。

蓮はいつも通りだった。何事もなかったように。ハルの報告。数値。経過。

(やっぱり気にしてないんだ、あの人は。私の自意識過剰だ)

安堵と、かすかな落胆が同時に来る。落胆。——なんで、落胆してるの。

ハルを撫でていたら、蓮が黙って見ていた。

「……笑うんだな、その犬の前だと」

振り向くと、蓮は視線を外して「独り言だ」と呟いた。

帰り際。玄関で靴を履いていたら、小さな紙袋を差し出された。

「犬用のサプリだ。退院後も飲ませろ。——お前が飲むわけじゃないから、ちゃんと寝ろ」

不器用な気遣い。紙袋を受け取る手が触れて、蓮の指は温かった。  
。

五日目の夜。小雨。

クリニックに着いたとき、髪が少し濡れていた。蓮が無言でタオルを渡す。自分で拭こうとしたけれど、後頭部がうまく拭けない。

「貸せ」

タオルを取り上げられた。蓮が背後に立って、犬を乾かすみたいに後頭部を拭く。タオル越しでも分かる掌の大きさ。毛並みを整えるみたいに丁寧に、後頭部から首筋へ。

「……蓮さん」

「蓮でいい。夜間クリニックに『先生』は堅い」

名前を呼べるようになった。それだけで、距離が変わった気がした。

タオルで拭き終えて、蓮の手が離れる。——と思ったのに、離れない。タオルを外した蓮の指が、そのまま私のうなじに留まっている。

呼吸が浅くなる。

「……風邪を引くぞ」

声が近い。背後に立ったまま。掌が温い。指が首の横に回り込んで、脈に触れている。脈を測っているのか——それとも。

反射的に身を引こうとした。「大丈夫」の壁が自動的に上がる。

手首を掴まれた。

逃がさない。でも強くない。動物を傷つけない、あの絶妙な力加減。

「大丈夫って言うな」

初めて聞く声色だった。低くて、少し苛立ったような。

「お前は——ここに来るたびに疲れてる。痩せた。目の下のクマが消えない。初日から見てる」

息を呑んだ。

(見られていた。あの素っ気ない態度の裏で、ずっと)

「飼い主の体調管理も獣医の仕事だ」

言い訳みたいに付け加えて、蓮は手を離した。

「帰れ。風呂に入って寝ろ」

帰った。でも今夜は帰りたくなかった。手首を掴まれた感触が消えない。

(「初日から見てる」って。——この人は、動物しか見てないと思ってた。私のことも、見ていた)

(あの手に触られたい)

認めたくない。でも身体が覚えてしまった。犬を撫でるみたいに私に触れる、あの手を——もっと。

「もっと」と思ってしまった自分に、動悸が止まらなかった。

六日目の夜。ハルの退院は明日。

つまり——今夜が、最後の通院。

一日中そのことを考えていた。明日でハルが帰ってくる。嬉しい。でも、もうこのクリニックに来る理由がなくなる。蓮に会う理由が。

一週間の契約が、終わる。

クリニックに着くと、ハルは元気になっていて、尻尾を千切れんばかりに振った。蓮が「明日の夕方、迎えに来い。退院の手続きをする」と淡々と言う。

「一週間、ありがとうございました」

頭を下げた。声が震えていないか自分で確認した。大丈夫。ちゃんと笑えている。お世話になりました。もう大丈夫です。一人で——

「——また、その顔だ」

蓮が呟いた。

「初日からずっとだ。泣きたいのに笑う。辛いのに大丈夫だと言う。犬の前でだけ本当の顔をして、人間の前では全部隠す」

笑顔が凍った。

「……一人で全部背負ってきたんだろう」

——バレている。全部。

「犬が倒れて初めて、人に助けを求めた。それが辛かったんだろう」

涙が落ちた。止められない。また。この人の前でだけ。

「お前は——」

蓮が一步近づく。一步下がる。ソファの縁が膝裏に当たった。

「もう一人で頑張らなくていい」

二十八年分の「大丈夫」が、全部嘘だったことを、この人に見抜かれた。

恥ずかしい。でも——嬉しい。

気づいたとき、自分から蓮の胸に飛び込んでいた。白衣を掴んで、顔を押しつけて——泣きながら唇を重ねた。

自分から。

涙の味がした。蓮の唇は温くて、少しコーヒーの匂いがした。

蓮が一瞬だけ硬直する。それから——大きな手が後頭部を包み込んで、深く、深くキスを返した。犬を撫でるみたいに優しい手のまま、でも離さない。離すつもりのない力で。

「……蓮、さん……」

「蓮でいいと言った」

キスの合間に。唇越しに震える低い声。

「帰すつもりだった。毎晩。帰れと言って、帰すつもりだった」

蓮の額が私の額に触れる。近い。吐息が混ざる。